

日本気象学会 昭和 44 年度

総 会 議 事 録

日 時 昭 和 44 年 5 月 22 日

場 所 気 象 庁 講 堂

出席通常会員 115名, 書面参加および委任状 612名, 総計 727名

定款第38条に基づき通常会員2378名の1/5以上(書面参加, 委任状を含む)の出席があり, 書面参加および委任状によらない出席会員数は1/25以上の条件を満たしているため総会成立。次に吉武大会委員長が満場一致で議長に推せんされた。

吉武素二氏が議長席につき, 総会が行なわれたが, その内容おのおのね次のとおりである。

(1) 山本理事長あいさつ(要旨)

今回の大会は気象庁がその後援を引受けて下さり, 御覧の通り万事非常に行届いた御世話になっていることを, 私から会員を代表して御礼申し上げます。

この頃環境科学の重要性が世間に認められるようになってきました, これは気象, 海洋, 地震など地球物理学一般に関係いたしますが, もちろん気象もそのうちの重要な部分を占めています。このような情勢に対応して, 御承知のように WMO を中核として, 全世界の気象官署の方では WWW という大計画を現在着々と実行に移しつつあります。また全世界の気象研究者も, これと呼応して GARP という研究計画を立案実行しつつあります。

今回の大会に, 従来にない程の多数の会員が参加されたことや, 気象学会への新入会員数が増えて, 会員数が2,375名という多数に達したことなども, 気象学に対する一般の関心が, あたかも潮の満つるように高まりつつあることの一つの証左と感じられ, 喜ばしい次第であります。

最近, 集誌, 天気, 気研ノート等の内容が充実してきたと思います。もちろんこれらをよくすることは一昨年の会費値上げの理由としての公約でもあり, もっと学界出版物の量的充実を希望される向きの多いことは承知しています。その実現の方法として, 本年は賛助会員数の増加をはかることを考えています。

なお本年度企画している事業の一つに, 外国文献集の刊行があります, これは数年前に一度行なったことがあり, 非常に好評でした。地方に在任して, 文献の入手に困難を感じておられる方々のためのものであることはいうまでもありませんが, 最近気象学が分化して, 専門外の方の文献はなかなか眼を通しにくいということもあ

って, 大都会に居住している方々にも好評であることを期待しています。

昨日の全国理事会の席上で, 学会はもっと地方支部の発展策を考えるべきであるということが論議されました。この問題については更に理事会で検討を重ねる予定ですが, 皆様からも御意見をきかせていただきたいものです。

最後に理事会は去る3月, 「気象業務ならびに気象学研究の整備拡充に関する要望書」を作り, 運輸大臣, 気象庁長官等関係方面へこの件の要望を致しました。

簡単ですが, これで私のあいさつを終らせていただきます。

(2) 気象学会賞授賞

山本理事長から推薦理由の紹介があり, 満場拍手のうちに, 松本誠一会員に賞状・賞牌・副賞が授与された。

昭和44年度日本気象学会賞受賞者推薦理由書 降雪に伴う中規模じょう乱に関する研究

松 本 誠 一 (気象研究所)

二 宮 洸 三 (同)

中規模気象じょう乱は, 天気現象を支配する重要な因子であることが明らかであったにもかかわらず, その本格的な研究は, 遅々として進まなかった。これは, ルーチン気象観測やレーダー観測資料のみでは, 中規模じょう乱の構造などを断片的に捕えるかまたは定性的にしか議論できなかったからである。1963年から5年間にわたって毎年冬季, 北陸地方沿岸に気象研究所を中心とし関係地方気象台, 測候所の努力によって, 特別気象観測網が展開されたが, 松本誠一, 二宮洸三両氏は, この特別観測資料を種々の角度から解析し, 豪雪を伴う中規模じょう乱およびそれに関連した現象の研究を推進して来た。

両氏は, まず豪雪に関連するドーム状寒気の構造と性

質を明らかにし、上層に侵入した寒気は海面からの著しいエネルギーの補給とあいまって、成層状態を不安定にし、対流活動のみならず中規模じょう乱発達のための条件を作り出すことを示した。上層の寒冷渦の通過に伴い、寒波の吹き出し寸前に豪雪が起ることが多い。これは寒波吹き出しの前線によると解釈するのが従来の総観的立場であった。松本、二宮両氏は解析法に新しい手法を導入して、中規模解析を施した。そのような前線は100km程度の規模で10時間以内の寿命でつぎつぎに発生消滅するような中規模じょう乱の集合体とみるのが妥当であることを示した。そしてその下層は収束、正渦度であり、上層は発散、負渦度という回転対流系を見出し、それがドーム状寒気の内部に限られていることおよび収束場、渦度場ともに 10^{-4}Sec^{-1} のオーダーであることを示した。そして、中規模の運動場で発散方程式の各項を評価し、収束場ではきわめて大きい残差項が残るが、発散場では小さいことを見出した。これにより収束場における活発な対流活動の効果を導入する契機を作った。

このような積雲対流の性状と降雪に対する寄与を明らかにした。エネルギー収支計算を行なって、積雪の分布は、海面からの水蒸気補給量と密接に関連していること、積雲の対流輸送が下層大気のエネルギー再分布に重要な寄与をしていることおよびこれが積雲の分布ならびに上昇流、温度差などの特性から定量的によく説明されることなどを示した。

さらに特定地点から発現する積雲列が、集中豪雪に関連を持つ場合のあることが指摘されているが、その原因を、気流に対する地形の屈曲効果と中規模じょう乱内の収束域との複合と考えられることを示した。

以上要するに、松本誠一、二宮洗三両氏は、豪雪を伴う中規模じょう乱の構造と役割を総観的規模の現象や積雲対流との関連において解明した。両氏のこのような研究は、わが国の気象学の発展に大きく寄与するものとして高く評価し、日本気象学会賞受賞者として推薦するに値する。

関係論文

1. Ninomiya, K.: Water-substance budget over the Japan Sea and the Japan Islands during the period of heavy snow storm. *J. meteor. Soc. Japan*, **42**, 317-329, 1964.
2. Matsumoto, S., T. Asai, K. Ninomiya, M. Iida and M. Takeuchi: Behaviour of the extraordinary cold vortex over the Far East coastal area observed during the period from 22 January to 24 January, 1963. *J. meteor. Soc. Japan*, **43**, 100-115, 1965.
3. Matsumoto, S. and K. Ninomiya: An aerophotographic observation of convective clouds in the vicinity of a cold dome center. *J. meteor. Soc. Japan*, **43**, 218-230, 1965.
4. Matsumoto, S. and K. Ninomiya: Some aspects of the cloud formation to the heat and moisture supply from the Japan Sea surface under a weak winter monsoon situation. *J. meteor. Soc. Japan*, **44**, 60-75, 1966.
5. Matsumoto, S.: Budget analysis on the sea effect snow observed along the Japan Sea coastal area. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 53-63, 1967.
6. Matsumoto S., K. Ninomiya and T. Akiyama: A synoptic and dynamic study on the three dimensional structure of mesoscale disturbances observed in the vicinity of a cold vortex center. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 64-82, 1967.
7. Matsumoto, S., K. Ninomiya and T. Akiyama: Cumulus activities in relation to the mesoscale convergence field. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 292-305, 1967.
8. Matsumoto, S., and K. Ninomiya: On the mesoscale warm core above the condensation level related to convective activities under the influence of dome shaped cold air. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 306-314, 1967.
9. Matsumoto, S., K. Ninomiya and K. Nakagaki: A remark on the upward velocity and the excess temperature in the cumulus convection observed by means of dropsonde observation. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 490-492, 1967.
10. Matsumoto, S.: Orographic edge effect on the downstream cumulus activity. *J. meteor. Soc. Japan*, **45**, 500-503, 1967.
11. Matsumoto, S., K. Ninomiya and T. Akiyama: Mesoscale analytic study on a lined-up cumulus row caused by orographic effect under the winter monsoon situation. *J. meteor. Soc. Ja-*

pan, 46, 222-233, 1968.

12. Ninomiya, K.: Heat and water budget over the Japan Sea and the Japan Islands in winter season... With special emphasis on the relation among the supply from sea surface, the convective transfer and the heavy snow-fall. J. meteor. Soc. Japan, 46, 343-372, 1968.
13. Ninomiya, K.: Cumulus group activity over the Japan Sea in wintertime in relation to the water vapor convergence in subcloud layer ... A statistical analysis of cumulus activity by using radar and aerophotographic cloud observation data. J. meteor. Soc. Japan, 46, 373-388, 1968.

(3) 藤原賞受賞

山本理事長から推薦理由の紹介があり、満場拍手のうち、高橋浩一郎会員に賞状・賞牌・副賞が授与された。

昭和44年度藤原賞受賞者推薦理由書

総観気象、気象統計に関する研究および

気象学の普及に貢献した業績

高橋浩一郎

(札幌管区気象台)

高橋氏はすでに学生時代、不規則な振動体の運動よりその周期および減衰率を求める独創的な研究を発表したが、その後その独創性は気象学の研究に注がれ、総観気象学、気象統計、長期予報、気候変動、気象災害などの各分野に数々の成果をあげた。また、後進の指導や一般社会への正しい気象知識の普及にも尽くし、理科教育、地学教育の発展を計るとともに数々の著書を出版した。また、たんに研究面だけでなく、日本気象学会の発展に長年にわたり、大いなる貢献を果たした。

なお数ある研究のなかでも動気候学についての同氏の業績は特に顕著で、高、低気圧の運動、天候の変化などを量的に表現し、天気予報の基礎として二十数年にわたり気象技術者の必読書となっているが、今なおその価値は高く評価されている。また、この研究の一環として生まれた量的予報の研究は、それまでの主観的方法をより客観化するとともに精度を高め、その成果に対し、昭和19年技術院賞が授けられた。また、長期予報の研究ではおもに周期性、太陽活動と気象との関係、気候変動など膨大な資料をたんねんにしらべ、その成果は外国の文献においても広く評価されている。

一方応用気象的研究として気象災害の O.R. 的研究が

過去数年にわたって続けられ、その成果は建築、土木、電力、交通方面や保険事業などにも応用されている。

氏の幅広い活動はさらに教育や指導の面にむけられ、戦後の混乱期には「新しい気象学、シリーズを企画したのをはじめ、自ら動気候学、応用気象論、長期予報、気象統計、気象災害論などの学術書を著述し、また、日本の気象、日本の天気など数多くのけいもう書を通して正しい気象知識の向上に成果をあげた。

以上のべたように、幅広い研究や著作活動はいろいろな面で気象学の進歩をもたらし、かつ、実際面への利用を開発した。それらの業績に対して、高橋氏を藤原賞受賞者として推薦するしだいである。

おもな関係論文および著書

1. 1933 発展現象の数式化. 科学, 3, 350-351.
2. 1933 器底の孔より流出する粒状物質の流出速度およびその他に関する実験. 理化学研究所彙報, 12, 984-993.
3. 1935 振動体の不規則なる運動よりその周期ならびに減衰率を求める方法について. 理化学研究所彙報, 14, 255-271.
4. 1938 関東地方の朝雨について. 気象集誌, 17, 261-267.
5. 1939 台風域内における気圧および風速の分布. 気象集誌, 17, 417-421.
6. 1940 海上を渡る際の乾冷氣塊の変形. 気象集誌, 18, 77-80.
7. 1941 風の予想について. 気象集誌, 19, 175-184.
8. 1941 気温の予想について. 気象集誌, 19, 363-368.
9. 1942 湿度の予想について. 気象集誌, 20, 39-42.
10. 1942 日本の動気候学. 気象集誌, 20, 171-181.
11. 1943 霧の発生について. 気象集誌, 21, 142-147.
12. 1943 気象観測の計画について. 気象集誌, 21, 377-385.
13. 1947 外挿法に基づく量的天気予報の研究. 研究速報, 13号, 14号.
14. 1950 Estimation of various energies of typhoon. Mem. Cent. Met. Obs. 35, 268-283.
15. 1954 On the relationship between typhoon

energy and damage amount. Proc. Unesco. Sym. on Typhoon.

16. 1957 On the decision of design wind speeds and the amount of precipitation by means of the Monte Carlo Method. 75th Anniversary Volume of J. meteor. Soc. Japan., 399-402.
17. 1957 災害に関するオペレイションズ・リサーチ. 研究時報, **9**, 1-34.
18. 1958 予報の効果. 測候時報, **25**, 328-332.
19. 1959 Further studies on the influence of the change of solar activity upon the meteorological phenomena. Pap. Met. Geophys. **10**, 55-73.
20. 1960 A numerical experiment of the atmospheric radiation. J. meteor. Soc. Japan., **38**, 175-181. (Katayama, Asakura 共著)
21. 1963 Final accuracy of the forecast of typhoon movement, Proc. Inter-regional Seminar on tropical Cyclones in Tokyo, 1962.
22. 1964 交通事故と気象との関係. 天気, **11**, 81-85.
23. 1965 Climatic change calculated by a simple heat transfer model at the earth surface. J. meteor. Soc. Japan, **43**, 188-195.
24. 1966 Key day analysis on the relationship between solar activity and precipitation. J. meteor. Soc. Japan., **44**, 246-254.
25. 1967 A study on the return period and design load by means of the Monte Carlo Method. Pap. Met. Geophys. **18**, 327-343.

著 書

- | | | |
|----------|--------|------|
| 1. 1944年 | 気象統計 | 河出書房 |
| 2. 1948 | 天気予報講話 | 地人書館 |
| 3. 1955 | 動気候学 | 岩波書店 |
| 4. 1955 | 長期予報 | " |
| 5. 1956 | 気象統計 | 地人書館 |
| 6. 1961 | 応用気象論 | 岩波書店 |
| 7. 1963 | 日本の天気 | " |
| 8. 1968 | 気象災害論 | 地人書館 |
| 9. 1969 | 総観気象学 | 岩波書店 |

(4) 昭和43年度事業経過報告

(竹内理事)

1. 昭和43年7月の第15期第1回の理事会において理事長各委員会担当理事が決定し、事業が発足した。
2. 学術会議会員選挙に際し、3名の候補者を決め推薦候補とした。なおこのうち2名(神山, 三宅候補)が当選した。また東北地区選出として、山本義一会員が当選した。
3. 発明協会の依頼により、昭和43年度地方発明表彰候補者として、穂田 巖, 中島正一, 伊達一俊, 川瀬二郎各会員を推薦した。後日表彰が決定した。題目は「可燃性ガス容器の自然発火の防止」である。表彰あるいは各種の賞について、その折々に推薦の依頼がきた。昨年度には前記の発明表彰のほか、松永賞, 山路ふみ子自然科学振興奨学賞, 朝日賞, 藤原財団の藤原賞, 朝日奨学金等の推薦依頼がきた。これらは毎年定期的に行なわれるので、予め天気を一括して載せ、十分な時間的余裕をもって推薦するようになりたい。
4. 前年と同様に夏期大学を開催したが、今回は聴講者90人、うち10人が学会に入会するという成果があった。支部でも開いたらどうかという意見が理事の間ででた。
5. 数年前刊行して好評であった外国文献の刊行を計画し、目下論文題目の選定中である。
6. WMO-IUGG—気象庁共催の数値予報シンポジウムが気象庁で開かれた。会員が多数参加した。なおそのプロシーデングスは原価で会員に配付する(天気に広告する予定)。
7. 前回の総会で成立し決定した学生会員の会費減額の件については、文部大臣に定款改正認可申請中のところ、10月1日付で認可されたので同日付で実施した。現在約50名が学生会員である。
8. 気象庁、気象研究所関係の定員5%削減に関連し、当学会がかねて決定した気象学研究の長期計画の線に反するので、むしろ整備拡充するよう運輸大臣に要望した。
9. 当学会の収入を増大するため、賛助会員の大幅増を計画し、目下各理事が手分けして獲得運動中である。
10. 先年度の会員増はA会員71名、B会員52名、外国在住会員9名、計132名で前年度の会員数の約5%増である。このように新入会員が増加するのは誠に同慶にたえない。

(5) 昭和43年度会計決算報告ならびに監査報告

(有住理事, 今井監事)

有住理事から別紙1のように決算書の報告があり、つづいて今井監事から監査の結果、予算どおり適切に経理され、帳簿の整理、会費の収納等も好成績であったと報告された。

議長より両報告を一括してはかり、異議なく拍手で承認可決された。

(6) 昭和44年度事業計画ならびに予算案審議

(竹内理事, 有住理事)

竹内理事から次のように事業計画案の説明があった。

1. 賛助会員の増加を引き続き進める。
2. 外国文献刊行を進める。
3. 東京における夏期大学は好評につき、今年度も実施する。
4. 秋季大会は10月21日(火)～23日(木)の3日間福岡で開催する。九電ビル地下会議室。
5. 「天気」の内容の充実を努める。差当りアンケートの結果等を考慮し、今年から入門講座を開始した。
6. 「気象集誌」の英文の質の向上を図るため投稿者の希望に応じ専門家の添作を行なうことになり4月号から実施している。
7. 「気象研究ノート」はいよいよ100号を迎えたので記念号として過去20年の気象学、気象技術に関する回顧、抱負などの原稿を公募したところ121人から投稿があり、近く刊行する。
8. 国際関係としては1973年にIAMAP総会が日本で開かれる予定で進んでいる。

次に有住理事から別紙2の予算案について説明があった。広田会員(東大)から気象集誌原稿が増加した場合の措置について質問があり、有住理事から対処可能の旨応答の後、事業計画・予算案とも原案どおり満場一致可決された。

(7) 名誉会員の推薦**1. 正野重方会員を名誉会員に推せんする件**

提案理由：本学会機関誌に、すぐれた論文を寄稿し気象学の発展に寄与した。

本学会役員として長期にわたり(理事通算19年7か月, うち理事長4年10か月)本会の維持発展に努めた。

東京大学教授として、永年にわたり気象学の発展に努めた。

それらの功績を高く評価し定款第6条第5

項を適用して、名誉会員に推薦したい。

山本理事長から提案理由を説明し、質問がなかったので、議長が採決した結果次のとおり賛成多数で推薦することに議決された。

賛成 683名(うち書面参加, 568名)

不可 8名(書面参加)

2. 島山久尚会員を名誉会員に推せんする件

提案理由：本学会機関誌に、すぐれた論文を寄稿し気象学の発展に寄与した。

本学会役員として長期にわたり(理事通算21年7か月, うち理事長9年8か月)本会の維持発展に努めた。

気象庁職員として、気象事業の発展ならびに気象技術の向上に努めた。

それらの功績を高く評価し定款第6条第5項を適用して、名誉会員に推薦したい。

山本理事長から提案理由を説明し、質問がなかったので、議長が採決した結果次のとおり賛成多数で推薦することに議決された。

賛成 681名(うち書面参加, 566名)

不可 9名(書面参加)

3. 和達清夫会員を名誉会員に推せんする件

提案理由：本学会機関誌に、すぐれた論文を寄稿し気象学の発展に寄与した。

本学会役員として長期にわたり(理事通算15年7か月, うち理事長5年9か月)本会の維持発展に努めた。

気象庁職員として、気象事業の発展ならびに気象技術の向上に努めた。

それらの功績を高く評価し定款第6条第5項を適用して、名誉会員に推薦したい。

山本理事長から提案理由を説明し、質問がなかったので、議長が採決した結果次のとおり賛成多数で推薦することに議決された。

賛成 674名(うち書面参加, 559名)

不可 16名(書面参加)

(8) 昭和45年度大会当番支部について

関西支部に秋季大会を受持って貰うことになった。

(9) 日本気象学会細則第3条中一部改正について

大田理事から昭和42年度秋季大会で定款の改正を議決した際同時に改正すべきであった細則第3条の一部改正がしてなかったので、定款第40条により本総会の追加議題としたいと次のとおり提案があった。

追加議題

日本気象学会細則第3条第2号中ニ. を次のとおり改める.

ニ. 会費
理由

賛助会員の会費は、定款では15,000円以上となっているのに、細則では1口10,000円単位となっており矛盾するので、口数を金額に改める.

(参照)

細則第3条 この法人に賛助会員として入会を希望するものは、次のことがらを書いた入会申込書を理事長に提出すること

- 1. 個人の場合は前条と同じとする
- 2. 団体の場合
 - イ、団体名
 - ロ、代表者氏名
 - ハ、所在地
 - ニ、納付口数（ただし1口は1年1万円とし1口以上）

(参考)

定款第6条 この会員の種別および会費は、次のとおりとする

- 1, 2, 3号 (省略)
- 4. 賛助会員 この法人の事業を後援し、会費年額金15,000円以上を納める個人又は団体
- 5. 号および第2項 (省略)

議長が議題とすることについて賛否をとったところ出席会員の全員賛成で議題とすることになった.

つづいて提案理由の説明を省略し質疑に入り、北岡会員(気象研究所)と大田理事との間に字句についての質疑応答があった.

議長が質疑のないことを確め採決したところ反対者なく、委任状および書面参加によらない出席通常会員の賛成多数(出席会員の4/5以上)で議決された.

理事長あいさつ関連資料

昭和44年3月30日

殿

日本気象学会理事長 山本 義一

気象業務および研究の整備拡充に関する要望書

近時、経済の高度成長に伴い、気象災害も一段とその規模が大きくなる一方、気象が生産力の増強に大きな影響を持つようになってきました.

気象災害を防ぎ、気象を経済の開発に寄与させるためには、気象業務の発展と気象学研究所の向上が要請されています。これにこたえるべく日本気象学会は、昭和40年度の総会においてその長期計画を採択しました。そして、この長期計画を実現させていくうえでの現実的な要件として、

- 1. 大気物理研究所の新設
- 2. 気象研究所の拡充強化
- 3. 気象庁各官署において気象学の調査研究が十分に行なうことができるための条件の確保
- 4. 各大学における気象学に関する講座の新設強化等

が必要であるとの見解に達し、その実現に努力しています。また、さきに衆議院災害対策特別委員会(昭和43年9月19日)は、「自然災害の防止に資するための気象業務の整備拡充に関する件」なる決議において気象業務の強化が必要なことを明らかにしました.

ところが、3か年に2~5%の定員削減が気象庁、気象研究所および気象庁各官署で行なわれようとしています。このような削減は、日本の気象業務が一段と発展し、気象学各分野が世界的レベルにまで向上することを妨げ、社会が気象人に寄せている要請に背を向ける結果をきたす一因となることを、わたくしたちはおそれているのです.

日本気象学会は、気象業務および気象学の正しい発展を期すうえから、このような「定員削減」を行わず、それらのいっそうの整備拡充をすることを要望します.

東北支部支部役員の新任について

改選の結果下記のとおり決まりました.

記

- 支部長 木村 耕三
- 常任理事 梅田 三郎
- 〃 吉田 作松

- 理 事 山本 義一
- 〃 大西 外史
- 〃 鈴木 徹
- 〃 青田 孝義
- 〃 田中 正一
- 〃 佐々木 徳治
- 〃 須川 力
- 幹 事 中西 秀二

(別紙1)

昭和43年度決算書

収 入 之 部			
科 目	金 額	内 訳	備 考
会 費	6,995,497	円	円
雑誌図書頒布	2,812,394		
気象研究ノート		1,996,946	
その他		815,448	
文部省助成金	180,000		
雑収入	1,098,697		
前年度繰越金	417,055		
合 計	11,503,643		
基 本 金		650,000	
職員退職積立金		350,000	
藤原賞基金		1,500,000	
支 出 之 部			
科 目	金 額	内 訳	備 考
印刷編集費	6,679,965	円	円
気象集誌		2,443,140	46/2~47/1
天 気		2,893,200	15/3~16/2
気象研究ノート		1,343,625	96~98
図書購入費	259,440		
発送通信費	946,078		
会 議 費	553,370		
総会大会費		250,000	
役員会費		189,785	
例会費		65,000	
外国委員会		10,000	
学术交流委員会		10,000	
選挙管理委員会		28,585	
学会賞	50,000		
支部交付金	204,050		
事務費	2,179,257		
人件費		1,283,000	
物品印刷費		617,435	
雑経費		278,822	
旅 費	44,000		
職員退職積立金	150,000		
次年度繰越運転資金	437,533		
合 計	11,503,643		

(別紙2)

昭和44年度予算書(案)

収 入 之 部			
科 目	金 額	内 訳	備 考
会 費	7,341,000	円	
A 会 費		2,367,000	会 員 数 1,315名
B 会 費		2,722,000	" 810名
団 体 会 員		192,000	学 生 会 員 80名
外 国 在 住 会 員		1,700,000	会 員 数 680口
贊 助 会 員		288,000	" 80名
雑 誌 図 書 頒 布	2,807,000		
気 象 研 究 ノ 一 ト		1,872,000	年 500 頁
そ の 他		935,000	
文 部 省 助 成 金	180,000		
雑 収 入	765,000		
前 年 度 繰 越 金	437,533		
合 計	11,530,533		
基 本 金		650,000	
職 員 退 職 積 立 金		350,000	
藤 原 賞 基 金		1,500,000	
支 出 之 部			
科 目	金 額	内 訳	備 考
印 刷 編 集 費 誌 気	6,438,000	円	
気 象 集 集 誌 気		2,081,000	1 回 76頁 6回
天 象 研 究 ノ 一 ト		2,797,000	1 回 44頁 12回
図 書 購 入 費	240,000	1,560,000	
図 発 会 送 通 議 會 大 會 費	1,100,000		
總 役 例 外 学 術 交 流 委 員 會 費	505,000	250,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		150,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		65,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		10,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		10,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		10,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		5,000	
藤 原 會 賞 委 員 會 費		5,000	
学 藤 支 部 交 務 費	50,000		
学 藤 支 部 交 務 費	50,000		
学 藤 支 部 交 務 費	200,000		
学 藤 支 部 交 務 費	1,886,000		
人 物 雜 費		1,236,000	
人 物 雜 費		400,000	
人 物 雜 費		250,000	
旅 職 予 次 年 度 繰 越 運 轉 資 金	50,000		
旅 職 予 次 年 度 繰 越 運 轉 資 金	150,000		
旅 職 予 次 年 度 繰 越 運 轉 資 金	340,000		
旅 職 予 次 年 度 繰 越 運 轉 資 金	521,533		
合 計	11,530,533		